

課題について（社会学）

社会学の講義内容を理解しているか、そして、社会学のスキルを実践してもらうために、課題を出します。以下の課題 A（易しい）、課題 B（難しい）のいずれかを選択して、所定用紙に手書きで記述した上、**6月9日（金）17時までに教務課のボックスに提出**すること。この課題は最終評価の20%（20点分）を占める。なお、記述の際には、ガイダンス資料の「4.テストや課題での論述の仕方について」「5.『パラグラフ・ライティング』による論述」を参考にすること（ガイダンス資料はウェブにもアップしている）。

■ 課題 A（易しい）

これまでの講義の内容のなかで、自分が思っていた常識、あるいは、世間で通用している常識とは異なる事実や視点が示されたものを一つ取り上げ、以下の形式で論じよ。

タイトル：論じるテーマと、それに対する自分の意見ないし感想を一言でまとめたタイトルをつける
第1段落：そのテーマについて、自分が思っていた常識、あるいは、世間で通用している常識について記す。
第2段落：講義で学んだ事実や視点について、分かりやすくまとめる。
第3段落：その上で、最終的な自分の意見・感想をまとめる。

※各段落は、複数の段落で構成しても構わない。

■ 課題 B（難しい）

これまでの講義の内容のなかで示された事実や視点を一つ取り上げ、自分の意見を以下の形式で論じよ。

タイトル：論じるテーマと、それに対する自分の意見を一言でまとめたタイトルをつける
第1段落：そのテーマについて、講義で示された事実や視点について、分かりやすくまとめる。
第2段落：その事実や視点に反する事実や視点を提示する。
第3段落：その上で、最終的な自分の意見をまとめる。

※各段落は、複数の段落で構成しても構わない。

次ページに示す採点基準で100点満点で評価する。その上で、**最終評価の際には、課題 A は16%をかけて評価し、課題 B は20%をかけて評価する**。たとえば、課題 A で100点を取った場合、 $100 \text{点} \times 16\% = 16 \text{点}$ となる。うまく書けなくても、用紙を埋めればそれなりに評価するので、単位が必要な学生は、必ず提出すること。

採点基準

■ 課題 A (点数の幅は、文章の量、内容の濃さに応じる)

第 1、第 2 段落 (70 点分)

60～70 点：講義の内容について、自分の言葉で十分に説明しており、自分なりの例も出している。

50～59 点：講義の内容を十分に踏まえて説明している or 不十分ではあるが、自分の言葉での説明や例がある。

35～49 点：最低限の説明はなされている。

0～34 点：論述の形式を満たしていない、その他。

第 3 段落 (30 点分)

0～30 点：講義の内容を踏まえた上で、自分の意見を記している。

0～15 点：講義の内容を踏まえていないが、自分の意見を記している。

0～15 点：講義の内容を踏まえた上で、自分の感想を記している。

0～10 点：講義の内容を踏まえていないが、自分の感想を記している。

※意見：自分なりに具体的な問題点を発見し、その解決策や考えるべきことを、「～するべきである」、「～することが考えられる」といったかたちで提案すること。

※感想：講義の内容に対して、思ったこと、感じたことだけを書くこと。

■ 課題 B (点数の幅は、文章の量、内容の濃さに応じる)

第 1 段落 (40 点分)

35～40 点：講義の内容について、自分の言葉で十分に説明しており、自分なりの例も出している。

25～34 点：講義の内容を十分に踏まえて説明している or 不十分ではあるが、自分の言葉での説明や例がある。

20～24 点：最低限の説明はなされている。

0～19 点：論述の形式を満たしていない、その他。

第 2 段落 (40 点分)

35～40 点：自分の言葉で十分に事実や視点を提示している。

25～34 点：不十分ではあるが、自分の言葉で事実や視点を提示している。

20～24 点：最低限の事実や視点を提示はなされている。

0～19 点：論述の形式を満たしていない、その他。

第 3 段落 (20 点分)

0～20 点：第 1、2 段落の内容を踏まえた上で、自分の意見を記している。

0～10 点：第 1、2 段落の内容を踏まえていないが、自分の意見を記している。

0～10 点：第 1、2 段落の内容を踏まえた上で、自分の感想を記している。

0～5 点：第 1、2 段落の内容を踏まえていないが、自分の感想を記している。

答案例

課題 A・②

テーマ「わたしたちの物語」を作るには、家族だけでなく、他者の視線も必要である

私たちは、なぜ結婚して家族を作るのか。近代以前では、結婚するのは子孫を残すためであり、つまりは家を守るためであった。一人ひとりの人間よりも家族の存続が大切であり、子どもができない場合は、平気で離婚される世界であった。そこでの人生の物語は、「私が生きているのは、家を守るため」というものであった。今でも、先祖代々の土地を手放そうとしない人がいるのは、そうした物語の名残であろう。

近代の家族は、愛情に基づいて結婚することになった。とはいえ、そこでも家族の目的は、目的は愛情をもって子どもを育てることであり、母性愛を発揮する専業主婦が誕生したのも近代に入ってからである。子どもを産み育てることは、国の繁栄に欠かせないことであった。かつて、「女性は子どもを生む機械」と失言した政治家がいた。そこでの人生の物語は、父親としての男らしい役割、母親としての女らしい役割を果たしているかどうかが決め手であった。

社会学によれば、そうした人生の物語の材料となるのは他者の視線である。自分自身について、いろいろな人からいろいろなことを言われ、その結果、自分とはどういう存在なのかという自己意識ができあがる。近代以前も近代も、一人ひとりの人間の個性を無視した社会的な役割に基づいて人間に視線が投げかけられ、社会の期待から外れるような人間（男らしくない男、女らしくない女など）は苦しむことになった。

しかし、現在の世の中は、「男女平等」になり、共働きも当たり前になっている。外で稼ぐ男性が上に立つという家族環境ではなくなっており、外で働く父親と家事をする母親というジェンダー役割に縛られなくなっている。したがって、今日の家族は、社会から与えられた役割にもとづいて形成されるものではなく、お互いが社会の役割にとらわれることなく、相手の個性を尊重し、コミュニケーションを重ねることで、お互いの個性を活かせるような家族を作ることが大切になっている。これが、家族で「わたしたちの物語」を作っていくということである。

*

しかし、本当に家族だけで「わたしたちの物語」をつくって良いのだろうか。たとえば、「不満なことがあれば、我慢することなく、自己主張しよう。家族のなかでコミュニケーションして納得できればそれで良い。それに対して、批判するよその人間は無視しよう」という家族の場合、地域と問題を起こすことなくやっていけるだろうか。

極端な例を挙げれば、家族全員が音楽が好きだからといって、近所への騒音の問題を考えるとなく、大音量で音楽を流せば、当然問題になる。それに対して、「わたしたちの家族が何をしようが勝手だ、社会のルールにしばられるのはおかしい」と主張しては、世の中が成り立たない。

*

したがって、社会の常識や役割にとらわれることなく、自由に「わたしたちの」物語を作っていくことが大切だからといって、どんな社会の常識や役割も拒否して良いわけではないということだ。では、どんな社会の常識や役割、他者の視線なら拒否して良いのか。差別や偏見に基づくルールや役割は拒否すべきだし、自己の存在そのものを否定するような他者からの視線も拒否して良いはずだ。

しかし、それ以外のルールや役割は、不特定多数の人びとが集まって生活している今日の社会の秩序を守るために不可欠なものである。もちろん、そうしたルールや役割のなかにも、間違っただけのものもある。それを変えたければ、理性的に議論を行い、ルールや役割を変えていこうとする態度が必要である。そうした態度を身につけるためにも、今日の家族は、コミュニケーションを核として形成されるべきであると考えている。